

‘The Ruined Cottage’ に関する考察

— MS.A と MS.D の行商人の語りの変化について —

大 石 瑠 子

はじめに

18世紀イギリスロマン派の詩人 William Wordsworth の ‘The Ruined Cottage’ は、行商人が Margaret の悲劇を旅の詩人に語り聞かせる物語詩である。しかし、友人の Coleridge の絶賛にもかかわらず、この詩が独立した作品として出版の機会に恵まれることはなかった。‘The Ruined Cottage’ の執筆期間は、1795年から1799年の4年間である。その間に Wordsworth は、MS.A, MS.B, MS.D の3度にわたり原稿の書き直しを行った。MS.A の行商人の語りは、Margaret という女性が遭遇した悲劇をありのままに伝えることに重点が置かれている。そこには、行商人に Margaret の身に起こった出来事を淡々と語らせることを通じて、彼女の境遇がいかに悲惨であったかを読者に訴え、彼女のような社会的弱者を戦争の犠牲にした政府を糾弾しようとする Wordsworth の意図が読み取れる。しかし、MS.A 執筆後、Wordsworth は作品を書き換える。この加筆は、Margaret の物語ではなく、行商人の語りを変えた。MS.A の行商人は過去の出来事を語るだけの語り手であった。ゆえに彼の語りから彼自身の感情を窺い知ることはできない。一方、MS.D の語りには、Margaret を失った彼の悲しみと彼女の死に何らかの意味を与えようとする彼の意図を見ることができる。

このような行商人の語りの変化は、後に Wordsworth 自身が MS.A で描いた Margaret の悲劇的な事件と向きあうことを回避する言い訳に映ると批判された。しかしながら、行商人の語りの変化を Wordsworth の言い訳に由来するものと簡単に片付けてしまうことには疑問が残る。なぜなら、この批評には ‘The Ruined Cottage’ の加筆の背景にある Wordsworth の重要な思想的転換への配慮が欠けているからである。ゆえに、本論文では、Wordsworth が MS.D の語りに変更を加えた動機について考察する。

‘The Ruined Cottage’ の執筆過程

MS.A, MS.B, MS.D の執筆期間とそれぞれの原稿の内容は以下の通りである。まず、MS.A は1797年の4月から6月に執筆された。この原稿は、マーガレットの悲劇に関するおよそ240行の詩行である。残念ながら、MS.A は原稿の一部が擦り切れているため、全体を把握することはできない。しかし、MS.A のテキストが MS.B の152-243行と一致することから ‘The Ruined Cottage’ の最初の原稿であると考えられる。一方、MS.B は1798年の1月から3月にかけて執筆され、詩の冒頭、

Part One と Part Two の Margaret の会話に挿入された詩人と行商人の対話，行商人の生い立ちが新たに書き加えられた。MS.B の特徴は，MS.A の内容を受け継ぎつつも，行商人の語り口に彼の感情が描き足されたことである。MS.D は 1799 年の 2 月から 11 月にかけて執筆され，その後 Dorothy Wordsworth によって清書された。MS.D において，Wordsworth は MS.B で加筆された行商人の生い立ちに関する詩行を削り，結びの詩行を付け加えた。

‘The Ruined Cottage’ は，Wordsworth の生前に出版されなかったため，原稿が，彼のノート，彼と彼の友人達の手紙，Dorothy Wordsworth の日記などに散在していた。このような状況下で膨大な資料を検証し，今日 ‘The Ruined Cottage’ として出版されている完成版テキストを決定したのは Jonathan Wordsworth である。彼は MS.B を過渡的な原稿とし，MS.D を最もバランスのとれた最終的な原稿であると主張した（Jonathan 16）。ゆえに，今日では一般的に MS.D が完成版テキストとして認識されている。Jonathan は MS.D をもちいて，‘The Ruined Cottage’ の執筆過程を説明する。まず，MS.D は 6 つのパートで構成される。

- (1) the first fifty lines
- (2) the bulk of Part One
- (3) the didactic transition between Part One and Part Two
- (4) the Pedler’s visits to the cottage
- (5) the Margaret’s last years
- (6) the final reconciliation

各パートが三つの原稿のどれをもとに書かれているのか照らし合わせてみたい。MS.A がもともとなった原稿は (2) (4) (5) である。そして MS.B で執筆された部分は (1) (3)，MS.D で書き加えられた部分は (6) である。Jonathan は各パートが執筆された順序を，(2) → (4) → (5)，6 ヶ月のブランクをあけて (3) → (1) → (6) と推測する（Jonathan 9）。このことから Wordsworth は，まず，マーガレットの生活の荒廃と彼女の死を描き，次に彼女の波乱の人生を描き，そして行商人の彼女の死に何らかの意味を与えようとする語りを描いたと考えられる。執筆時期と完成版原稿の構成を比較すると，この作品が初めから明らかな構成に基づいて執筆されたと言うより，むしろ無計画に継ぎ足される形で執筆されたことが推察される。

MS.A の概要と主題

MS.A が執筆されたのは 1797 年の 4 月から 6 月にかけてである。MS.A は MS.D にそのまま受け継がれる原稿だが，MS.D とは趣が異なる。MS.D の行商人は Margaret の困窮に同情し，彼女の死を嘆く。しかし MS.A の行商人は彼女の身の上に起きた出来事をありのままに語るだけであり，彼の語りから彼女の死に対する彼の感情を窺い知ることはできない。MS.A の行商人の語り口から感情が排

除されたのは、彼女が置かれた境遇がいかに悲惨であったかを読者に訴えるのに、語り手の感情は不要であると Wordsworth が考えたからだろう。

そもそも MS.A 執筆の動機は、当時の政府への糾弾であったと考えられる。MS.A の先駆けとなる ‘Incipient Madness’ の草稿を見るとそのことがよりはっきりとわかる (Moorman 314)。この草稿では、Margaret の物語の筋書きは示されるものの、女主人公に名前はなく、語り手も登場しない。おそらく、‘Incipient Madness’ が執筆された当時、Wordsworth は女性主人公の性格をはっきりと決めていなかったのだろう。このことから、Wordsworth の関心が女主人公の内面よりも、彼女が置かれた境遇そのものを描くことに向けられていたことが窺われる。MS.A において、この女主人公は Margaret と名付けられるが、彼女の人間像には、‘Incipient Madness’ と同時期に書かれた他の作品との類似性が認められる。‘Incipient Madness’ が執筆された当時、Wordsworth は ‘An Evening Walk’ と ‘Adventures on Salisbury Plain’ という戦争と貧困に翻弄される女性を描いた2つの作品を執筆した。3つの作品に描かれた女性たちは、戦争や貧困によって夫と離別を余儀なくされ、不遇のうちに亡くなっていく。彼女たちのような女性に Wordsworth が強い関心を抱いており、貧困に見舞われた女性のイメージが彼の中で出来上がっていたと考えられる。

さらに、‘Adventures on Salisbury Plain’ と ‘The Ruined Cottage’ には構成上の類似点も見ることができる。‘Adventures on Salisbury Plain’ は不遇に見舞われた男女を一对にして構成される。なぜなら、語り手である男女は夫婦であり、二人は社会生活における運命共同体だからである。水夫である男性が不幸に見舞われることは、そのまま彼の妻である女性を不遇へ追いやることにつながる。一方、MS.A は、夫の Robert の語りがないため、一見すると女性側の不幸のみを主題に扱った作品であるように見える。しかし、Wordsworth は夫である Robert の不遇をも念頭において MS.A を執筆していたと考えられる。作品中一貫して、廃屋は妻の物語の舞台であり、彼女を襲った過酷な運命を証明する唯一の物証である。それにも関わらず、MS.A にはほとんど登場しない夫の所有物の馬が廃屋の光景とともに描写されている。このことから、Wordsworth は、廃屋が象徴する貧困と不幸の対象として、Margaret とともに Robert を認識していたと考えられる。つまり、夫の悲劇の背景にある妻の悲劇を描くという構想があったと考えることが可能である。

ここから、MS.A は ‘Adventures on Salisbury Plain’ と非常に近い動機および構想のもとに執筆されたことが推測される。‘Adventures on Salisbury Plain’ は、水夫と妻の語りが書かれたあと、妻の悲劇のみを独立させ ‘The Female Vagrant’ と題して発表したという経緯がある。一方、MS.A は妻の悲劇が書かれ、そののちに対となる兵隊となった夫の悲劇が描かれる計画があったが、その後のテーマ変更によって夫の悲劇が夫の側から描かれることのないまま作品が書きすすめられたと推測される。そのような経緯から、MS.B によって Robert の不遇が付け加えられる際には、彼の身の上は女性の視点から語られるにとどまり、廃屋は Margaret の小屋とされたのではないだろうか。

‘Adventures on Salisbury Plain’ 執筆のきっかけは対仏戦争であった。Wordsworth は、1814年に Payne Collier に宛てた手紙で、1793年の Wight 島で対仏戦争出撃のため停泊していた英国艦隊を目

にし、貧民階級が戦争の災禍にさらされることに心を痛め、この詩の構想ができたと告白する⁽¹⁾。
 ‘Adventures on Salisbury Plain’ と ‘The Ruined Cottage’ の類似点を考慮すると、‘The Ruined Cottage’
 の当初の執筆もまた、社会への批判と社会的弱者への憐憫が執筆動機になったと考えることが可能だ
 ろう。

MS.D の概要と主題

前述のように、‘The Ruined Cottage’ は当初、Margaret の悲劇な出来事を冷静に描き出すことによつて戦争による社会的弱者の窮状を訴えることを意図して書き始められた。しかし、Wordsworth は MS.A が書かれた6ヵ月後に加筆を始める。この加筆は行商人の風貌や生い立ち、彼の語りなど、ほとんどが行商人に関する記述であった。この加筆で注目すべきは、彼にまつわる描写が書き加えられたことによって、彼の語りの端々に Margaret を失った彼の悲しみが窺えるようになったことである。MS.A において、行商人はありのままの事実を語る語り手だが、加筆後の行商人は Margaret を失った悲しみを語る語り手である。MS.D の 116-19 行には、行商人の悲しみと葛藤が彼の語りに端的に表れている。Margaret がかつて住んでいた小屋の前の木陰に腰を下ろし、行商人は詩人に Margaret の思い出を語りだす。小屋の周囲の自然は美しく陽気さにあふれている。しかし、行商人は彼女にまつわる悲しい記憶のために、自然の美しさをありのままに受け入れることができず、以下のように語りだす。

‘You will forgive me, Sir,
 But often on this cottage do I muse
 As on a picture, till my wiser mind
 Sinks, yielding to the foolishness of grief.’
 (116-19)

「だんな、ゆるしておくれ、
 この小屋をまるで絵に描かれたもののようには眺めていると
 そのうち私の分別ある精神は沈んでしまつて
 おろかな心の悲しみに服従してしまう。」
 (116-19)

行商人は、悲しみのために現在の風景の美しさをありのままに受け入れることができないことを、「愚かな悲しみ」であるという。そしてその理由を「人間的な弱さ」が彼の目を曇らせ、美しく、陽気な自然のあり様を悲しいものに見せてしまうからだと言ふ。彼の言葉からは Margaret の死を悼む感情と、悲しみによって本来の自然の美しさを感じるができなくなった自らを戒める感情の二つが読み取れる。

このような行商人の語りの変化は、Margaretの悲劇によって Wordsworth が表現しようとしていたものが変化していたことを物語っている。当初、Wordsworth はこの作品によって社会的弱者の窮状を訴えようとしていた。ゆえに、Margaretの悲劇は弱者の貧困を具体的に提示する一例に過ぎなかった。しかし、感情をもった語り手によって彼女の悲劇が語られるとき、それは単なる過去のありのままの出来事ではありえない。なぜなら、悲しみが美しい自然の風景を憂鬱なものへ変えてしまうように、語り手の感情は過去の出来事をゆがめ、語り手が思い描く物語へと変容させてしまうからである。すなわち、行商人の語り口に彼の悲しみと葛藤を描き加えたことによって、この作品は悲劇的な出来事に対面した個人の悲しみとその悲しみにどのような心理的解決を見出すかを描いた作品へと変化した。行商人の悲劇に対する心理的解決は、彼女の死に寄せられた彼の語りにも見ることができる。以下は行商人の語りの結びにあたる部分である。

“My Friend, enough to sorrow have you given,
The purposes of wisdom ask no more;
Be wise and cheerful, and no longer read
The forms of things with an unworthy eye.
She sleeps in the calm earth, and peace is here.
I well remember that those very plumes,
Those weeds, and the high spear-grass on that wall,
By mist and silent rain-drops silvered o’er,
As once I passed, did to my mind convey
So still an image of tranquility,
So calm and still, and looked so beautiful
Amid the uneasy thoughts which filled my mind
That what we feel of sorrow and despair
From ruin and from change, and all the grief
The passing shows of being leave behind,
Appeared an idle dream that could not live
Where meditation was.

(508-24)

「友よ、お前はもう十分に悲しんだ
自然の知の目的をこれ以上問うな
賢く、陽気であれ、ものの姿を
もう不相応な目で読むのはやめよ

彼女は今、大地のうちに安らかに眠り、平和がある。
 私はよく覚えている
 かつて私がそばを通った時
 私の心は不安な思いでいっぱいだったが、
 あの羽の形をした草、あの雑草、
 あの壁の背の高い槍草が
 霧と静かな雨露に銀色に輝く姿がとても美しく
 静かに、穏やかに、思われたので、
 破滅と変化から
 私たちが感じる悲しみや絶望も
 去りゆく存在が残すすべての嘆きも
 瞑想のあるところ
 生き続けることのできない虚しい夢のように思われた。
 (508-24)

行商人は旅の詩人に「友よ、お前はもう十分に悲しんだ。/ 自然の知の目的をこれ以上問うな。/ 賢く、陽気であれ、ものの姿を / もう不相応な目で読むのはやめよ」と語りかける。ここで語られる「不相応な目」とは、Margaret の死による悲しみを知ったことによって、陽気で美しい自然のありように目を向けることができなくなってしまった詩人の目を示している。このような目では家を覆う草木は、荒廃を象徴する悲しい対象としてしか映らない。しかし、行商人があえて悲しみを捨て去った時、それらは美しい静謐の象徴へと変化するという。ゆえに、彼は悲しい現実を見つめ続けることを、「もう十分」であるといい、「破滅と変化から私たちが感じるすべての悲しみや絶望」と「去りゆく存在が残すすべての嘆き」を「虚しい夢」であるという。このような行商人の態度の変化ゆえに、Margaret の悲しい出来事を通じて語られる主題もまた変更される。MS.A の主題が彼女の悲劇的運命であるならば、MS.D の主題は彼女の悲劇を超えた自然の美しさや喜びである。行商人の語り口の変化には、この作品の主題の変更が端的に表れているといえるだろう。

両者間の矛盾への批判

しかしながら、Wordsworth の加筆が引き起こした主題の変更は、後に批判の対象となった。Florence Marsh は、508-24 行における行商人の語りに対して、MS.A で Wordsworth 自身が描いた悲劇と対峙することを回避した言い訳に映ると批判した (Marsh 61)。確かに、MS.D の行商人の前半の語りと後半の語りには食い違いが存在する。物語の前半、Margaret の家や庭を覆う雑草は行商人にとって荒廃と彼女の死のシンボルであった。しかし、物語の結末、そのような雑草は彼にとって霧と雨露にぬれた静謐の美しいシンボルとなっている (Marsh 61)。しかし、このような矛盾があるか

らといって、それを悲劇から回避した言い訳として批判していいのだろうか。

そもそも Wordsworth はなぜ ‘The Ruined Cottage’ の加筆を行ったのか。‘Adventures on Salisbury Plain’ にはそのことを知るカギがある。同作品は女浮浪者の過去の幸福と、貧困による没落を描いた物語詩として、Wordsworth の他の作品にはない波乱にとんだストーリーを有する（上島 94）。しかし、Wordsworth は 1814 年の Payne Collier に宛てた手紙で、「この詩は素朴な同情心に訴えたもので、想像力をほとんどたないか、あるいは、欠いたものだった。」（“It was addressed to coarse sympathies, and had little or no imagination.”）と告白している（Selincourt 334）。1814 年の Wordsworth 自身によるこのような評価は、彼が個人の悲劇を克明につづることによって弱者の窮状を訴えるような形の詩に限界を感じていたことを窺わせる。また Wordsworth の自伝的思索の書である *The Prelude* の第 6 巻では、Buttermere の Mary の物語が Wordsworth 自身によって語られる。Wordsworth は、彼女の壮絶な人生を聞き知った当初、彼女に深い同情の念を抱き、彼女の不運と不遇による人間性の喪失に心を痛めたと語る。しかし、彼は当時の自らを振り返って、「その当時は / これ以上深く思索することはなかった」（*The Prelude* 432-33）といい、その理由として彼の「激しい感情が / 思考をとめてしまったからだ」（*The Prelude* 435-36）と告白する。Mary の悲劇は同情に値するが、それはあくまでも個人の悲劇であり、それ以上のものではない。彼自身の言葉が示すように、Wordsworth は同情心から個人の不幸を見つめるだけでは悲劇との対峙は不完全であり、同情心を超えた視点で悲劇を達観する必要があると考えていたことが窺える。

Wordsworth のこのような悲劇の描写の変化が起きた時期と、‘The Ruined Cottage’ に加筆修正を加えていた時期は重なっている。*The Prelude* の第 7 巻の告白や、1794 年から 1795 年にかけての詩人と William Godwin の間に親密な交流から窺えるように、当時の Wordsworth には Godwin への信仰があったと考えられる。しかしながら、フランス革命後のフランス国土の惨状が徐々に明らかになり、英国世論が保守化するとともに、Godwinism を取り巻く状況は激変した。そのことが Godwin の思想に心酔していた Wordsworth の創作活動に影響を与えたことは想像に難くない。MS.B と MS.D が執筆された 1790 年代後半が、Wordsworth にとって自己の価値観との葛藤の時期であり、作品を再構成するために模索した時期であったと考えられる。Moorman は、1798 年の Wordsworth が Godwin に感化されていたとしつつも、彼は独自の詩的方法で人間の悲劇との和解を試みていたと指摘した（Moorman 280）。ゆえに、彼が悲劇と和解するための新たな視点を模索した結果が、行商人の語り口の変化に現れたと考える方が妥当だろう。

おわりに

‘The Ruined Cottage’ の加筆における行商人の語り口の変化は、作品の主題の変更を反映している。MS.A では、Margaret の人生の悲惨さそのものが主題であった。Wordsworth は行商人に Margaret の身の上をありのままに語らせることによって、彼女のような弱者がいかに困窮しているかを社会に訴えようとした。しかし、作品への加筆によって、行商人は彼自身の感情を語る語り手へと変貌する。

MS.D の主題は、Margaret の悲劇に対面した行商人がどのような方法で悲劇に心理的解決を図るかである。行商人が、「悲しみの中には / 友好的な道德の力を / しばし見出すことができ、またおそろく常に見いだすことができるかもしれない。」（‘The Ruined Cottage’ 227-29）と語ったように、悲劇と対面した個人の心理を描くことによって悲劇を克服する新たな解決策を模索した Wordsworth の思惑が窺える。

さらに、MS.D の行商人の嘆きは Margaret の不遇だけではなく、彼女が幸せであった過去が失われた事にもむけられる。MS.A のように、社会的弱者の悲劇をありのままに描くだけでは、悲劇を他者の視点から見ることしかできない。行商人は自らが切々と感じる喪失感を語ることによって悲劇の本質への接近を試み、その上で Margaret の死の悲しみを排除する。そして荒廃した家の前に腰をおろし、彼女の死を再度見つめなおしたとき、彼は彼女が死によって自然との平和な一体化を遂げたことに気づいたのである。

Wordsworth の女浮浪者や Mary にむける同情的な眼差しは、MS.A に描かれた行商人の Margaret にむける眼差しに通じるものがある。加筆による行商人の語りの変化は、個人の悲劇をありのままに語り、社会的弱者の窮状を訴えようとする MS.A の作風からの旅立ちであり、個人の悲劇を超えた次元で悲劇と対峙しようとする Wordsworth の意識を反映している。つまり、人間の悲劇との和解という主題の変更は、悲劇を回避するための言い訳ではない。むしろ、個人の悲劇の延長線上に見出された、新たな詩人独自の悲劇との対峙ゆえのものであったのではないだろうか。

なお、本論文は早稲田大学文学部英語英文学会・教育学部英語英文学会 2009 年度合同大会での口頭発表に加筆修正を施したものである。

注(1) 1793 年の夏、Wight 島に滞在した際、Wordsworth は対仏戦争出撃のため停泊していた英国艦隊を目撃する。そのときの Wordsworth は「陰鬱な予感」に襲われ、「この戦争はきっと長引くし、どんな予想をもこえた苦悩と悲惨を招くに違いないと思った」と述懐した。そして Wight 島を離れ、Salisbury 平原に滞在する間に、「私は現代社会のある側面、とくに戦争によってもたらされる災禍とを比較しないではいられなかった。他のどの階層にも増して貧民階級がその災禍にさらされるのである。こうした施策に、たまたま知るにいたった具体的事実が合わさって以下の詩行（Salisbury Plain）が構想されるにいたった」1814 年に Payne Collier への手紙より。（Wordsworth, 334.）より引用。

引用文献リスト

- Marsh, Florence. *Wordsworth Imagery: A Study in Poetic Vision*. New Haven: Yale UP, 1963.
- Moorman, Mary. *William Wordsworth, A Biography; The Early Years. 1770–1803*. Oxford: Oxford UP, 1968.
- Fosso, Kurot. *Buried Communities: Wordsworth and the Bonds of Mourning*. Albany: State U of New York P, 2004.
- Wordsworth, Jonathan. *The Music of Humanity*. London: Nelson, 1969.
- Wordsworth, William. *The Poetical Works of William Wordsworth*, vol.1. E. de Selincourt and Helen Darbishire, eds., Oxford: Clarendon Press, 1952.
- ワーズワース, コールリッジ著 上島健吉編. 『リリカル・バラッズ』第3巻. 研究社 1993 年.